

1 亜炭のころ

まず入口では、埋木を積んだトロッコが来場者を出迎える。これは栗駒の岩倉炭鉱で実際に使われていたもので、床にはレールも敷かれていた。背後には野原の中を坑夫が一人トロッコを押す舟形町の炭鉱風景。その横の受付で観覧用のブックライト(蛍光物質に反応する長波長の電灯)を手渡され、暗幕の中へと案内される。

コメントが綴られる。だがしばらくすると発光し終わった蓄光シート上の文字は再び消えていくため、来場者は坑夫同様、灯りで壁を探りながら闇を「掘り進む」ことになる。

シートには、当時の小学校の木造校舎や街の風景、埋木細工のさまざまな形も手描きされていて、進むにつれてさながら光の絵巻物の様相を呈してくる。また山神情報や、本紙未掲載

暗い会場の壁には、蓄光シート(受けた光を蓄えて一定時間発光する素材)が貼りめぐらされており、来場者はその表面に書かれた文字をライトで照らしながら読み進むしかけになっている。文字はシートと同じ色なのではじめは見えないが、周囲が光を蓄えてほんのり明るくなるにつれて次第に浮かび上がってくる。



2 埋木原木庭園

埋木細工の展示は、工芸展として明治以降数多く開催されている。漆で美しく仕上げられた完成品は見たことがあっても原材料の姿を知る人は少ない。そこ



で今回の展示では、向山の橋川埋木店に残る貴重な原木を床にいくつも並べ、地中に横たわっていたであろう原木の姿を再現した。さらにすべての塊の1ヶ所を茶托と同じようにていねいに削って塗装し、完成品のツヤも再現。加工前後の違いが一目でわかる空間作品に仕上げた。歩きながら見ると、そのツヤは照明の光を受けて田毎(たご)の月のように反射する。展示会タイトルの「山のひかり」は、炭鉱山の未来とカンテラの灯をダブらせた鉱山保安法10周年記念の歌の引用だが、ここでは埋木の光沢

の炭鉱会社の女性社員の内温まる手記、何件も落盤事故の検死を行なった警官の生々しい証言なども登場。来場者によって掘り出された光跡が次の鑑賞者の道標となつて書き継がれていくという視覚効果が、記憶のあり方を暗示する。

と銘打たれた2枚の特大トロッコ写真を皮切りに、今まで本紙で取り上げてきた内容が、7章に区切られた空間に豊富な傍証を加えて展開されている。また初日には、照越炭鉱(築館)の炭鉱紙芝居、本誌編集の伊達伸明氏による松浦丹次郎氏(川埋木研究)、哲学者の鷲田清一氏との2本の対談も併催された。ここでは7つのエリアごとに展示内容を報告する。

亜炭香古学の4年間の活動が展示会として結実した。その名も「山のひかり 川のほし」。2015年8月8日から18日まで青葉区のせんだいメディアテークで開催され、亜炭・山埋木・川埋木の資料や貴重な実物が大集結。この半世紀の間ほとんど顧みられることのなかった地域史に脚光が当たった。「仙台文化遺産 亜炭と埋もれ木」「またたく記憶の紡ぎ方」

亜炭香古学の展示会

「山のひかり 川のほし」開催

2015.8.8~8.18

せんだいメディアテーク6F

3 植物園の穴

青葉山の東北大学植物園に、度々実施した調査の内容が「植物園の穴」と題して公開された。入坑できた園内最大の地下壕の平面図や60

分の1の模型、壕内の写真その他の開口部を含む現況報告書などが並んだ。昭和40年代には市内の亜炭坑はすべて埋め戻され、現在坑内調査ができることはない。そのため、青葉山の亜炭層を掘り抜いて作られたこの地下壕は、構造や歴史的経緯から見て軍用と思われるもの、地中で炭層の断面を肉眼で見ることが可能な貴重な場所。調査チームは映像やトンネル工学などの専門家を交えながら計4回入坑し、内部の様子をつぶさに記録した。

5 談話室

順路の中間地点にあたるこの空間には、地質・地域史・古代植生・工芸をはじめとするさまざまな分野の資料や成果物がみっちり並び、そこはいわば美術館と博物館と図書館と資料室が融合した「地域情報センター」。その中には、環境測量という観点から仙台を見続ける東北工業大学名誉教授の松山正将氏の膨大な研究資料もあり、来場者は中央の円卓でそれらを読むことができるだけでなく、会期の午前中は随時解説を聞くことができた。また郷土資料収集家・村上正博氏の所蔵品、埋木みがき隊の作品、子供達に人気の「さわれる亜炭山ジオラマ」などもあつて、亜炭時代を知らない人も充分楽しめる。亜炭という名の特殊なペンで描き始めたおぼろげな「まち」の姿を、資料を読んだり、当時を知る人と話したり聞いたりしながら一枚の点描画に育てていく場所、それが談話室である。

最後は「もう一つの埋木・幻の川埋木の世界」の文字が迎える川埋木特集エリア。そのパネルには、展示会直前に発見された名取川埋木の全容写真、手前には輪切りの実物と阿武隈川産の大きな埋木の根っこが置かれていた。

ここまでの展示内容が山埋木のみを紹介したため、まず両者の違いを明治期の出版物などを引用して比較展示。そのあと瑞巖寺・埋木書院(旧八木久兵衛宅)やさまざまな現われ方を紹介し、少なくとも明治までは仙台文化の中心的存在であったにもかかわらず現在ほとんど触れる機会がなく

なつた川埋木の世界についてひもといていく。福島県のおぶくま沈木会の活動紹介パネルとともに並べられた160点を超える膨大な川埋木作品は、いづれも手に取ることで可能。重さや手ざわりだけでなく、カスターネット・拍子木では音も鑑賞できた。

本紙9号で紹介した埋木楽器「ウモレレ」と「埋木文臺勸進の歌」もここに登場する。ウモレレは、沈木会の松浦丹次郎氏を迎えて展示初日にメディアテーク1階のオーブンスクエアで開かれたトークイベント「嗚呼、なんたる川埋木!」の中で演奏された。

6 ホタル河原

2014年に実施したホタルの思い出アンケートの内容を「亜炭のころ」同様蓄光シート上の文字で紹介。ブックライトのはかない光跡が、夕暮れ時のホタルのそれと重なる。

寒冷紗で仕切られた内側ではモビールが微風を受けてゆるやかに動いている。吊るされた銀色の玉の反射も蚊帳越しに見るホタルのよう。BGMの広瀬川のせせらぎとあいまつて、ありし日の抒情がよみがえる。

7 川埋木の世界

ここは、坑道内の様子と、実際にそこで働いていた坑夫達の心の内に迫るエリア。感できるように作られた。天井高は実際よりも高いが

のことも意味する。もちろん橋川埋木店の在庫品や道具、埋木職人・故赤木鶴之助氏作の鷹の置物や皿などの優品なども見られる。その他、往時の職人の工房や採掘の様子などの文献写真もパネルで紹介。

の体験した」という事故のエピソードなどの中でひととき印象的なのは、三本木の炭坑を渡り歩いて18年、亜炭山の栄枯盛衰を目の当たりにし、終末期の悲哀を俳句に詠み続けた古内一吐氏の作品集(本紙7号に記事)。句集から抜粋された12句が坑夫の心を生々しく語る。最後の「坑歴ばかりの履歴書を書く雪の果(炭坑離職後、縁あつて書いた炭坑履歴ばかりの履歴書を前に、よぎる一抹の虚しさ詠む)」で暗闇が終わる。

4 坑夫のころ

このころ、坑道内の様子と、実際にそこで働いていた坑夫達の心の内に迫るエリア。感できるように作られた。天井高は実際よりも高いが



台形の坑木が組まれた暗い坑道が擬似的に再現され、来場者はその中をブックライトで蓄光シートを照らし、描かれた坑内の様子や写真を読み進んでいく。足元にはカンテラやコルピック(磐石機)などの採掘道具、地上で選炭婦が用いた手斧やメッカエ(ざる)の道具などが並ぶ。

「得意先に迷惑はかけられない。万全を期して亜炭を届けろ!」という供給側の心意気や、「木杵がきしみを詠む)」で暗闇が終わる。



本紙は本号をもって休刊いたします。4年間の「愛読」に感謝申し上げます。